

山下秀樹*：岩宿時代研究と古植生復元

Hideki YAMASHITA * : Problems on the Study of Iwajyuku Age Culture and Vegetational Reconstruction

要旨 近年の岩宿時代研究は、考古学的事実の把握を越えて、解釈の領域に踏み込みつつある。ところがその実践のためには多分に学際的な検討が要求されるものの、必ずしもそのための背景が整っているとは考えられない。そこで本論では古植生研究を取り上げ、岩宿時代研究から見て検討が望まれる三点について、その必要性和問題点の提起を行った。第一点は植物質食料資源の質・量と分布に係わる課題である。食料となる植物種は必ずしも植生の優占種とはならないために、この検討のためには群落のより詳細な復元と共に意識的に食料たり得る植物の生育の可能性を追求する必要がある。第二点は森林内の下生えの稠密度の復元についてである。林内での見通しの程度は、当時の狩猟技術の質と相関する可能性が考えられ重要である。これまでも森林を構成する樹種の記載は中・高木から低木にまで及ぶが、それらの分布密度に言及した例を知らない。第三点は森林の被覆率である。これは狩猟技術とともに集落の設営場所の選定に影響すると考えられる。これも何が生育していたかに止まらず、森林景観や開地の有無とその広がりまで復元できることが望ましい。

キーワード：岩宿時代、森林の被覆率、下生えの密度、植物群落、植物質食料資源

Abstract This thesis will demonstrate the necessity of viewing the reconstruction of Iwajyuku Age vegetation from two standpoints. First, reconstruction studies have tended to emphasize arbors which form the forest canopy, in spite of the presence of many other miscellaneous tree and herb species. In prehistory, however, these species were not only component of the environment but they were also potential resources for people inhabiting the forests. Therefore, reconstructions of plant communities should include all species, their distribution and potential uses in order to have a better understanding of the people's lives. Second, the density of the underbrush in forests and the distribution of forest and open space must be investigated because these factors must have affected the way people hunted and where they settled.

Key Words : Iwajyuku Age, Palaeolithic Age of Japan, Palaeovegetation, Plant communities, Useful resources

1. はじめに

岩宿時代(鈴木, 1990)研究は、石器以外に出土するものが少ないという資料的制約もあって、石器に研究の主眼が置かれてきた。まずは石器を利用して、歴史的叙述のための時間的・空間的枠組みを作り上げようとしたのである。1970年代、その方向性に一定の見通しが立ってくると、岩宿時代文化をもう少し具体的な像として描くための努力がなされるようになる。その結果が、学際的研究の志向と考古学資料の分析方法の開発に表れている。古植生に関する情報を考古学に取り込もうとする試みもその典型で、70年代以降に活発化する。遺跡の発掘に当たって、花粉分析のための試料を採取することが多くなったのもこの頃からである。岩宿時代の人々の生活が環境に大きく制約されていたと考えられる故の、必然的な成り行きと言えよう。

しかしながら「学際的」とされるこうした調査・研究も、岩宿時代については必ずしも十分な成果を上げてはいないように思える。考古学関係の文献の多くは花粉分析の成果をただ掲載するに留まっており、計画的な路線に沿って研究が行われ、その成果が考古学的に吟味されて提示された例はあまりなかったの

* 〒604 京都市中京区三条高倉 京都文化博物館

The Museum of Kyoto, Sanjo Takakura, Nakagyo-ku, Kyoto 604, Japan.

ではなからうか。

その根本的な理由の一つは、岩宿時代といえどもすれば石器＝狩猟＝動物といった視点が主流で、狩猟活動のみがクローズアップされてきた経緯がある。植物質食料の消費を裏付ける利器が狩猟活動に伴う遺物に比べ乏しいため、経済基盤としての植物質食料の採取と消費が考古学的検討の俎上に上りにくかったのであろう。そうした中では、植物相は人間の諸活動を包み込む単なる周辺環境としての地位しか与えられなかったように思う。しかしひとたび考古学を離れ、民族学的な視点で岩宿時代の日本列島を見ると、必ずしも狩猟一辺倒の世界であったとは考えられず、植物採集や漁猟活動も視野に入れておくべき地域に位置すると思えるのである(LEE, 1968)。むしろ狩猟と採集そして漁猟の何れもが生活の基盤となり得る可能性を持った地域なのであり、今後は採集からさらに漁猟活動までに視野を広げた研究の展開が望まれるのである。

第二には、考古学側の研究水準が現在ほど高められていなかったため、本論で述べるような共同研究の下地が十分醸成されていなかったこと、さらには考古学の古植生に対する理解が不十分だったのではないかと思われる。そのため共同研究者に対し率直な要求がなされて来なかったのではないかと、自戒を含めた危惧がある。

そうした中で、近年になってこれまでの古植物学的成果を、考古学的な視野の中で捉えようとした試みも行われている(鈴木, 1988)。鈴木の研究は、生活環境としてのみならず、「食料と生業」の視点から植生を概観している。植物界に積極的に働きかけて利用する人間の立場から、これまで以上に深い考察を加えており、この問題について現在の考古学側から発言できる到達点をも示している。しかしながら、個別の遺跡や遺跡群に関わる考古学的諸現象の中には、食料に限らず植生環境に関係すると思える属性は多い。両者の関係をさらに深く多面的に検討しようとする、今まで以上に詳細で具体的な植生復元が望まれるのである。

本稿では、岩宿時代を研究する者としてのこのような思いから、当面は地形的にまとまりのある数十 km 四方に広がる遺跡群から一遺跡までの考古学資料を研究することを想定し、主として食料資源とそれを獲得するための日常生活の場を復元することを念頭に置いて、古植生研究に対する希望を記したい。

もちろん筆者自身は植物生態学を専門とはしないため、既存資料の理解において誤謬を冒している可能性も多分にあると思っている。しかし、一つには我々の求めるものを明示すること、第二には我々の希望のどこまでが実現可能なのかを知りたいために、敢えて本稿を草した次第である。我々の立場からすると、たとえ植物学的に少々の問題点があろうとも、それを乗り越えて以下に記すような試みをするに価値がある時期に来ていると考えられるのである。

2. 岩宿時代研究の現状と古植生の関わり

現在の岩宿時代研究のテーマは多岐にわたり、個々の石器や遺構の機能的解釈、遺跡の分布・立地・規模の解釈、そして生業の復元と、人間生活のあらゆる局面を研究に取り込もうと努力している。そしてその多くが、植生環境とも少なからぬ関係を持つと考えられるのである。こうした問題についての考古学独自の方法による研究成果を通して、植生との関わりを概観しておこう。

まず石器では、人々の直接的な自然界への働きかけを物語る資料として、形態学的な分析や使用痕研究が行われ、運動機能や使用対象物が推定されている。なかでも使用痕研究は、実験研究を経ることで、「骨」「肉」「皮」「木質」「竹」「イネ科植物」等の被加工物のおよその推定を可能とし(阿子島, 1989)、実際の遺跡にも適用されている(梶原, 1983, 1986)。被加工物の種の同定までは当然のことながら及んでいないが、梶原(1983)が座散乱木遺跡で指摘するように、遺跡周辺の環境復元がより詳細に行われていれば、使用痕研究によって推定される被加工物の大枠を、より具体的な対象として論じられる可能性が開けて来るのではあるまいか。この研究は、遺跡単位で石器の機能と被加工物の概要を検討するには極めて有効な方法であり、事例の積み重ねと条件整備が待たれる。

岩宿時代の遺構はもともと種類が少ないが、植生との関係で当面の問題となるのは、最も普遍的に発見される礫群の機能であろう。これは、数十から数百の焼け礫が数 m²の範囲に集中して残されるものである。その焼けた礫に付着する物質や礫そのものの属性分析によって、調理施設である可能性が強く支持されて

いる(保坂, 1987; 辻本, 1987; 金山, 1987)。調理対象物については、脂肪酸分析から動物質のものと植物質のものを含むことが指摘されている(中野, 1989)が、これも植生環境がよりよくわかっていれば、もうすこし可能性を絞り込むことができよう。

遺跡の分布・立地・規模に関する論考も似た状況にある。これらに認められる諸現象は、狩猟を主とした生業手段や推定される捕獲対象物(春成, 1976, 大森司, 1990)、植物質食料資源の分布(山下, 1990)に少なからず関わって解釈されている。しかし、やはり動・植物ともにその古生態を復元することが困難なだけに、そうした食料資源に規制された頻繁な移動生活を送っていたと言う前提の下に、むしろ社会的な背景の研究に重点を置くことがおおい(稲田, 1981; 安蒜, 1985)ようである。また織笠(1991)が事例研究の中で述べするように、自然環境と文化的な諸現象の対比に慎重な態度をとる場合でも、やはりその解釈とさらに発展的な議論を展開するためには、より詳細な環境復元が急務である。

また、最近では理科学研究方法の開発によって、直接当時の食料資源を探ろうとする試みもされるようになってきた。しかし残留脂肪酸分析では依然として分析例が少ないためか、植物質食料については明快な検出例を知らない。また、炭素・窒素安定同位体(赤澤・南川, 1989; 南川, 1990)による食料事情の研究は、縄文時代については考古学的成果とあいまって興味深い成果を上げているが、岩宿時代については分析対象となる人骨がほとんど見つからないこともあって、なかなか展望が開けない状況にある。

以上のように、考古学的方法によって得られた成果は、その背景となる当時の植生環境が十分解明されていないだけに、どちらかと言うといまひとつ具体性を欠いた一方的な推量の域を脱せないでいる。そして残念なことに、岩宿時代研究の現状は、上述の行き詰まった状況を打開する直接的な手段を、ほとんど持たないと考えられるのである。こうしたテーマに関わる推論の是非を検討するには、もはや古植生のより詳細で考古学的な視点に立った復元が不可欠と考えられるのである。

3. 群落としての古植生復元

こうした意味で古植生研究に望みたい視点の一つは、群落としての植生復元である。これまでの植生復元の主な材料であった花粉分析は、花粉の飛散する性質のために、ともすれば広域の植生復元に主眼を置いた資料との印象を与えてきた。日本各地の花粉分析結果を使って、研究の比較的早い段階で列島規模の植生復元が行われている(塚田, 1974)ことでも、その辺りの事情は推察できる。一方で、大型植物化石を含む泥炭層が遺跡に隣接して発見されたり花粉分析データが増加してくると、特定遺跡の限定された範囲内で、より視覚的な植生復元が行われるようになった(安田, 1980, 1987; 稲田編, 1988)。ところがいざずれの場合も、数十種の植物の存在を示す花粉分析や大型植物遺体の同定データを利用してしながら、復元された内容では樹冠を構成したりマクロな景観に影響を及ぼす数種の中・高木樹種に記述が偏っており、「その他」の樹種や草本類に解説が及ぶことは少ない。どちらかと言えば、遺跡を含む周辺の景観を復元しているという印象が強いものであった。それはそれで、遺跡を取り巻く雰囲気より視覚的に読者に伝える意味で重要な役割を果たしており、そうした試みは今後も続けられる必要がある。

ところが、考古学の進歩によって今日ほど研究の対象が多様化してくると、もはや漠然とした周辺環境と言う意味合いを越えて、より具体的な有用資源の源として植生環境を捉えなおす必要が生じて来ている。考古学では、当然のことながら遺跡周辺の植生を、一般的な意味での受動的な漠然とした環境として捉える以上に、住民が能動的な働きかけを行う直接的な対象と考える。人々は膨大な量の植物資源に働きかけて、そこから食料としてまた生活資材として有用な資源を引き出しているはずなのである。人々が働きかけるのは、古植生復元によって巨視的に描かれた「・・・樹林」と言う漠とした抽象化されたものではなく、もっと具体性を持った個々の植物種なのである。

考古学側としては、「その他」を含めた分析結果としての事実を詳述することは勿論のこと、それに加えて、極端な言い方をすれば花粉や大型遺体そのものは未検出であっても、生態学的特性を考慮し論理的にそこに生育した可能性の高い全植物リストが提示され、さらにそれらの分布を含めた遺跡周辺植生の復元に言及されることを望みたいのである。なかでも、当時の人々の主要食料たり得た可能性のある植物種、たとえばチョウセンゴヨウ・クリ・グルミ・トチ・ハシバミ・ミズナラ・コナラ・ワラビ・クズ・ユリ・各種のイチゴなどについては、ことさら生育の可能性と分布域の推定に言及してもらいたいものである。

岩宿時代の潜在的な植物質食料資源の研究が遅々として進展していないだけに、その第一歩としてはこうした試みの行われることが必要なのであろう。

考古学で求める有用植物は、必ずしも自然植生の中での優占種であるとは限らない。その意味では、潜在的な有用資源のリストを整備し、ことさら注意を喚起するのは考古学側の使命であるが、これについては縄文時代を対象にすでにいくつかの試みが行われており(渡辺, 1975; 辻, 1976)、直接的な資料を欠く岩宿時代の有用植物資源の研究でも大いに参考になる。

このような我々の希望を実現するためには、現在よく行われる遺跡を点として研究する方法に留まらず、そこを中心とした半径数キロメートルの地域の、大規模で緻密な学際的な総合調査が求められることになる。これについては、考古学側のこうしたテーマへの取り組みに対する積極性に問題がある。また一方では時間的・経済的な問題はもとより、現生植物の社会生態や古環境、古植生と現在を繋ぐ植生史など、研究が不十分なものが多いのであろう。しかし解釈の段階に至った岩宿時代研究の閉塞感と、自然環境のより詳細な復元が持つそうした状況の打開策としての可能性を考慮すると、たとえ小規模な試みではあっても、是非挑戦してみたい課題である。

ところで、古植生研究が化石試料として把握できない潜在的に生育した可能性のある植物種の推定復元に慎重になるのは、植生史が十分解明されていないことにあるように思われる。この辺りの事情を知る一助として、最近の岩宿時代研究で食料としての利用が話題になっているチョウセンゴヨウ(鈴木, 1984, 1988; 佐々木, 1991)が、どのような条件下に生育し、どのような樹種と共伴するのかを探ってみた。

まずチョウセンゴヨウの生育環境を、日本のみで資料で簡単に「日本植物群落図説」(宮脇・奥田編, 1990)から引くと、亜高山針葉樹林のマイズルソーコメツガ群集からシラビソオオシラビソ群集下部にかけて混生するようである。分布の中心となるマイズルソーコメツガ群集は、「痩せ尾根に土地的極相として成立するほか、本州内陸では1,700 m前後の亜高山帯下部に気候的極相林を形成」する。優占種はコメツガ・トウヒで、ウラジロモミ・クロベ・キタゴヨウほかの高木が混生する。これ以上に詳細で具体的な個別研究は検討していないが、優占種になることは無く、亜寒帯気候下で細々と生育している様が看取される。

ところが同じチョウセンゴヨウでも、朝鮮半島の生育環境は大いに異なっている。第一に日本と朝鮮半島では、生育最適ゾーン(Optimal range)の温量指数(WI)に大きな差がある。日本では温量指数22~40の亜寒帯に、朝鮮半島では同45~81の冷温帯に最適ゾーンが認められている(YIM, Y.-J., 1977)。これはYIMも指摘するように、氷期の遺存種として環境的に圧迫される地位にしかない日本のものと、繁栄を極める朝鮮半島のものととの植生史の違いが端的に表現されているのであろう。また中国の植生からは、主分布域(Main range)のWIは36~69とされている(FANG, J. & YODA, K., 1989)。したがって、現在の日本のチョウセンゴヨウがバイアスを強く受けたものとしても、朝鮮半島と中国のデータから、同種が冷温帯を中心に亜寒帯にまで分布することが推定できる。

次に共伴する可食植物を見ると、朝鮮半島を扱ったYIM(1977)の研究ではクリとオニグルミ・イチイが認められる。クリの生育最適ゾーンはWI 75~98であるが、朝鮮民主主義人民共和国の北半部を除き、朝鮮半島の広い範囲でチョウセンゴヨウに共伴する。またオニグルミとイチイは、生育最適ゾーンがチョウセンゴヨウとほとんど同じである。中国ではさらに多くの種が認められる。チョウセンゴヨウの森林が最も発達した長白山周辺の資料(郎・李, 1959; 斉編, 1989; 黄ほか, 1959)から、可食植物を抜き出してみよう。長白山麓では、チョウセンゴヨウを主とした森林が海拔500~1200 mに広がっており、その中にはオニグルミ・ハシバミ・イチイ・マタタビ・サルナシ・各種のスグリ・イチゴ類・ヤマブドウ・ニンジン・ワラビ・ゼンマイ・メシダなどが生えるようである。

YIM(1977)の扱ったのは50種の代表的な木本に限られるので他についてはわからないが、長白山の様相からすると、かなり豊かな可食植物リストが考えられそうである。しかし、この場合でも最北端の長白山地帯周辺ではクリは生育しておらず、単純に考えても日本の岩宿時代との対比と言う意味では、どの地域を想定すれば良かに問題がある。また、これら個々の社会生態や生産量はわかっていない。しかしもっと根本的には、日本と朝鮮半島のチョウセンゴヨウの最適生育ゾーンのずれから、1万年余りの環境の変動によって、植物社会が大きく変化しているらしいことが窺える。日本と朝鮮半島におけるここに至る植生

史がどこまでの確に把握できているかわからないが、その過程の解明が不十分な段階で氷期の古植生と現在の植生を対応させて安易な解釈を下すことを避けるという学界全体の慎重な姿勢は当然とも思える。

4. 森林景観と林分の被覆率の推定

個々の植物種とのより詳細な対応関係を求める群落復元よりも、よりマクロな森林景観と強く関わる考古学的研究のテーマは、狩猟形態と集落の設営・規模に関する問題であろう。

狩猟形態は、人員構成の上で巻狩りのような集団猟から個人猟まで、また狩猟具では手槍・投げ槍・弓矢のような投射具・網などがあり、陥穴のような狩猟施設との組合せで各種考えることができる。それらは、狩猟具や狩猟方法を含めて、森林相と密接な関係を持っていると考えられる。たとえば、岩宿時代終末から縄文時代初頭にかけて狩猟具が大きく変化するが、それには植物相と動物相の変化が関わっているといわれている（鈴木，1972；稲田，1986）。すなわち森林が稠密になり見通しが効かなくなると共に、狩猟対象が大型獣から中・小型獣に変わったために、より迅速な動きに対応できるように投槍や弓矢が出現したということである。

これは、落葉広葉樹林や常緑針葉樹林をある程度しか知らない我々にも判りやすい説明である。完新世の林内の稠密さについては、現在の林相から我々なりの推定をすることができる。しかし一方で、実は更新世の森林内の様相についての具体的な資料や発言はほとんどないに等しいのではなかろうか。森林を構成する中・高木層を中心にした樹種の記載は比較的多いものの、実際の狩猟方法に影響を与えるのは、古植生研究ではほとんど扱われない、低木層を含むいわゆる下生えの密度やオープンランドの広がりである。それらは、獲物の視認と同時に狩猟者自らを遮蔽するものの有無として、狩猟技術を左右したに相違ない（原子，1977；寺嶋，1984）が、この点について具体的に言及した例を知らない。

一方、各地の遺跡で復元された景観図には、草原の中に森林がパッチ状に広がるもの（安田，1980，1987）とはさみ山（稲田，1988）や富沢（仙台市教育委員会，1989）のように森林が主体の場合があるが、列島規模で復元された古植生図ではいずれも「・・・樹林」と記載されている地域がほとんど（安田，1980；塚田，1984）である。疎林の広がりを感じさせる解説は、わずかに日浦による地表環境区分（亀井・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ，1981）くらいであろう。また、北方に向かって降水量の減少する吉林省中部地域ではどうかかわからないが、チョウセンゴヨウの多い長白山麓では、内部の見通しの悪い密閉した森林が発達するという（斉編，1989）。もし疎林や開地の広がりの方が優勢であるとすれば、それに適した動物相や狩猟方法を考慮しておかなければならない。いずれにしても、森林の中・下層部のより詳細な復元像と、開地と森林の分布は、考古資料として追跡できる狩猟具の変化の歴史的な評価と深く関わっていると考えられるのである。

次に、集落の設営・規模と植物相との関わりを見てみよう。これは、森林景観と言うよりも開地がどのくらい広がっていたかと言う、森林の被覆率と関係すると考えられる。西南日本の2.3万年前以降のナイフ形石器文化段階の遺跡規模を見てみると、一遺跡で千 m^2 から数千 m^2 にも達する広がりを持つものが少なからずある（山下，1990）。その範囲には、石器や礫を含む数個から十数個の遺物集中部が含まれている。それらは全てが同時に残されたとは限らないが、数個単位で集落を形成していたと解釈されることが多い（栗島，1986）。そして長い年月にわたる回帰的な生活の間に徐々に居住位置が移動し、結果として広い面積の集落跡が残されたと考えられるのである。

これほどの広い面積を持つ集落は、いったい森林内か開地かいずれに営まれたものなのであろうか。もし森林内に営まれた集落であるとすれば、その設営に当たっては大規模な伐採によるオープンスペースの獲得や、小規模ながら継続的な伐採を必要とするのではなかろうか。逆に、比較的まばらな森林であるとか開地が広がるような景観の所であれば、伐採はほとんど必要なく、樹木を避けて任意に集落要素を周囲に拡張することができると思える。

そこで、一般的な未開民族の営む集落を見てみよう。参考になる資料は限られた地域にわずかに求められるのみで、普遍化することの是非が問われる可能性もあるが、比較的共通の特徴を認めることができる。なお集落を最初に林内に開くところから、それが安定あるいは放棄されるまでの経過を詳細に観察・記録した例は、市川光雄氏に御教示いただいたムブティ・ピグミー以外には見つからなかった。そのためここ

での判断の多くが、参照した民族誌の、既存の集落を取り巻く森林環境とキャンプ設営に関わる記載、図解された集落構成諸要素の配置、さらに写真記録にもとづいていることをお断りしておく。

まず森林内に住む例として、ザイール熱帯林のムプティ・ピグミーを見てみよう。彼らは中心的集落と10ヶ所近いハンティングキャンプを持っている(市川, 1982)。ハンティングキャンプは、条件が良ければ回帰的に何年にもわたって利用されるが、一回のみで放棄されることもある。最初にハンティングキャンプが開かれる時には、大きな木は残して小径木と下生えのみが刈り取られる。ところが条件に恵まれたキャンプは、回帰的な利用が続く間に次第に集落内の木はなくなり、開けた空間が出来上がることになる。その結果、周囲が森林に囲まれ中央に広場を持つ模式的な集落景観が完成するようである。ここでは周囲の森林が障壁として作用するのか、無秩序に集落が広がることはないようである。

エフェ・ピグミーでも似た成果が得られている(FISHER, 1987)。ここではキャンプ地の円形度が計算され、正円形のものはないが平均で0.505の楕円形を呈するとされている。また、キャンプ地の面積は40~550 m²(平均242.7 m²)で最大12の住居を持ち、住居の数とキャンプ地の面積は強い相関関係を示すようである。

このように、森林内にある数戸からなる安定的なキャンプは楕円形から円形に近いプランを持ち、居住の結果として概して林冠が開け、集落も無秩序には広がらない。これらに認められる共通点は、頭上が開けて青空を仰ぎ見れるような明るい空間を獲得している点と、集落要素の分布範囲が比較的限定される点ではあるまいか。前者は閉塞した空間を忌避する人類に共通する感性、後者は稠密な森林内に住むが故の物理的な必然とも考えられるのである。

一方、実は比較的オープンな地域に住む民族でも、単一居住時期の集落要素の配置を見ると、あたかも円形に分布する例は認められる(田中, 1971; YELLEN, 1977)。しかし、開地ではキャンプ地の広がりや物理的に制限する要素が乏しい。そのため、田中(1971)がセントラル・ブッシュマンについて報告するように「・・・何カ月も前に放棄した、朽ちたキャンプ跡の近くの適当な木立の中に、新しいキャンプ地を選ぶ・・・」ことになる。すなわち要点は水場や食料資源に近いことであり、それを満たすかなり広い自由な空間の中から、最終的な住居設営場所が任意に決められることになる。そのため、限定された空間でのように居住パターンが継続することはなく、回帰する度に集落要素の配置は少しずつ変動することになる。こうした繰り返しが重複すると、結果は錯綜した無秩序な様相を呈することになると考えられる。

これを岩宿時代の西南日本の考古学資料と照合すると、少なくとも3万年前位から2.5万年前位まで盛行した伐採・加工具の斧形石器が、その後はほとんど作られなくなる。一旦は獲得していた機能が、その後1.3万年前位まで、ほとんど振り返られない状況が続くのである。したがって現状では、最寒冷期を挟む約1万年の間は、樹木を伐採・加工するような営みそのものが極めて低調であったと判断せざるを得ない。また、安定した大型構造物の存在を想起させるような遺構が未発見であることから、おおがかりな木工作業の存在には否定的である。そうだとすれば、遺跡の広がりや民族誌に認められる傾向からは、もともと森林要素の乏しいオープンランドに集落を構えるのが一般的だったと考える方が蓋然性は高いのではなからうか。どの方向にでも集落を広げ得る自由な空間の中から、任意に居住の場を選択して行ったと考えた方が、遺跡の広がりや理解し易いと思われるのである。

もちろん、より厳密には現在のたかだか数十年の民族例の観察結果を、数百年から数千年にも及ぶかと思われる考古学的時間幅の中に適用することの是非が問われる必要があることは言うまでもない。また、遺跡内での集落構成要素の時間的な分布位置の移動も、考古学的な時間幅を考えればほとんど不動であるとの見解も取り得る。しかし大規模遺跡に見る移動の頻度は、周囲に開地を控えた集落でのランダムな居住地の拡大や移動の存在を支持するように思える。

これに加えて、同一地域における遺跡群の存在と同時期の遺跡の分布密度の高さも、周辺一帯にオープンランドが広がっていた可能性を指示すると考えられる。全国には数多くの遺跡群が存在し、まだまだ個々の構成遺跡について帰属時期を検討した訳ではないが、関東地方のローム台地や愛鷹山麓周辺、磐田原台地など、数百mおきにほぼ同時期の遺跡が分布する例もある。これらは、当時の人々の装備からすると移動のたびに新たに森林を開拓したと考えるよりも、もともと開けた土地が断続するなかで、任意にキャンプ地を選択していったと考える方が無理がないように思えるのである。

逆に、近年注目されるようになったAT下位の環状集落は、周囲の森林環境に規制された集落形態と考えることもできる。斧形石器の共伴を考慮すると、一層森林環境との結びつきが想起されるのではあるまいか。

謝辞：本論を書くに当たって、文献の収集では辻井達一・高原 光・市川光雄・大塚和義・中村 愿の諸先生方に御世話になった。記して謝意を表する次第である。

引用文献

- 赤澤 威・南川雅男. 1989. 炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生活の復元. 「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」(第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編), 132-143. クバプロ, 東京.
- 阿子島 香. 1989. 石器の使用痕. 95 pp. ニュー・サイエンス社, 東京.
- 安森政雄. 1985. 先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造. 「論集日本原史」(論集日本原史刊行会編), 193-216. 吉川弘文館, 東京.
- FANG, J. & YODA, K. 1989. Climate and Vegetation in China II. Distribution of Main Vegetation Types and Thermal Climate. *Ecol. Res.*, 4: 71-83.
- FISHER, J. W. Jr. 1987. Shadows in the forest: Ethnoarchaeology among the Efe Pygmies. 236 pp. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- 原子令三. 1977. ムブティピグミーの生態人類学的研究. 「人類の自然誌」(伊谷純一郎ほか編), 29-95. 雄山閣, 東京.
- 春成秀爾. 1976. 先土器・縄文時代の画期について(1). 考古学研究, 22(4): 68-92.
- 保坂康夫. 1987. 礫群使用の非日常性について. 古代文化, 39(7): 18-35.
- 黄 錫畴・劉 徳生・李 禎. 1959. 長白山北側の自然景観帯. 地理学報, 25(6): 435-448.
- 市川光雄. 1982. 森の狩猟民. 255 pp. 人文書院, 京都.
- 稲田孝司. 1981. 先土器時代遺跡群のとらえ方. 「報告・野辺山シンポジウム1980」(明治大学考古学研究室編), 78-81. 明治大学考古学研究室, 東京.
- . 1986. 縄文文化の形成. 「岩波講座日本考古学6」(近藤義郎ほか編), 65-117. 岩波書店, 東京.
- 編. 1988. 旧石器人の生活と集団. 198 pp. 講談社, 東京.
- 梶原 洋. 1983. 第1章5. 13層上面出土石器群の使用痕研究. 「座散乱木遺跡」(岡村道雄ほか著), 32-36. 石器文化談話会, 仙台.
- . 1986. 第4章 第20層上面出土石器の使用痕分析. 「馬場壇A遺跡I」(東北歴史資料館ほか編), 104-108. 宮城県文化財保護協会, 仙台.
- 亀井節夫・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ. 1981. 最終氷期における日本列島の動・植物相. 第四紀研究, 20(3): 191-205.
- 金山嘉昭. 1987. 先土器時代の礫群研究史. 古代文化, 39(7): 36-51.
- 栗島義明. 1986. 先土器時代遺跡の構造論研究序説. 土曜考古, No. 11: 55-87.
- 郎 恵卿・李 禎. 1959. 長白山的植物地理. 地理知識, No. 12: 546-550.
- LEE, R. B. 1968. What Hunters Do for Living, or, How to Make Out on Scarce Resources. 「Man the Hunter」, 30-48. Chicago.
- 南川雅男. 1990. アイソトープ食性解析からみる先史モンゴロイドの食生態. モンゴロイド, No. 6: 24-29.
- 宮脇 昭・奥田重俊編. 1990. 日本植物群落図説. 800 pp. 至文堂, 東京.
- 中野益男. 1989. 残留脂肪酸による古代復元. 「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」(第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編), 114-131. クバプロ, 東京.
- 大森司紀之. 1990. 旧石器遺跡の位置と狩猟獣の季節移動ルートに関する考察. 第四紀研究, 29(3): 287-289.
- 織笠 昭. 1991. [1]先土器時代人の生活領域. 「日本村落史講座6」(日本村落史講座編集委員会編), 3-

26. 雄山閣, 東京.

齊 景山編. 1989. 長白山志. 431 pp. 吉林文史出版社, 長春.

佐々木高明. 1991. 日本史誕生. 366 pp. 集英社, 東京.

仙台市教育委員会. 1989. 富沢を探る. 15 pp. 仙台市教育委員会文化財課, 仙台.

鈴木忠司. 1984. 先土器時代の知識. 170 pp. 東京美術, 東京.

———. 1988. 素描・日本先土器時代の食料と生業. 朱雀, No. 1: 1-40.

———. 1990. 先土器・旧石器そして岩宿時代. 古代学研究所研究紀要, No. 1: 1-17.

鈴木道之助. 1972. 縄文時代早創期初頭の狩猟活動. 考古学ジャーナル, No. 76: 10-20.

田中二郎. 1971. ブッシュマン. 210 pp. 思索社, 東京.

寺嶋秀明. 1984. ムボテ族の狩猟生活. 「アフリカ文化の研究」(伊谷純一郎ほか編), 165-225. アカデミア出版会, 京都.

辻 秀子. 1976. 可食植物の概観. 「縄文文化の研究2」(加藤晋平ほか編), 18-41. 雄山閣, 東京.

辻本崇夫. 1987. 礫群の形成過程復原とその意味. 古代文化, 39(7): 2-17.

塚田松雄. 1974. 古生態学 II. 231 pp. 共立出版, 東京.

———. 1984. 日本列島における約2万年前の植生図. 日本生態学会誌, 31: 203-208.

渡辺 誠. 1975. 縄文時代の植物食. 187 pp. 雄山閣, 東京.

山下秀樹. 1990. ナイフ形石器文化後半期の遺跡の規模. 朱雀, No. 3: 1-29.

安田喜憲. 1980. 環境考古学事始. 270 pp. 日本放送出版協会, 東京.

———. 1987. 世界史のなかの縄文文化. 298 pp. 雄山閣, 東京.

YELLEN, J. E. 1977. Archaeological Approaches to the Present. 259 pp. Academic Press, New York.

YIM, Y.-J. 1977. Distribution of Forest Vegetation and Climate in the Korean Peninsula III. Distribution of Tree Species Along the Thermal Gradient. Jpn. J. Ecol., 27: 177-189.

(1992年6月1日受付)

書評 (新刊紹介): COLES, B. (ed.). 1992. *The Wetland Revolution in Prehistory*. 153 pp. The Prehistoric Society & WARP, Exeter.

本書は1991年4月にエクセター大学で開催された先史学会とWARP (Wetland Archaeology Research Project) 共催の、書名と同じテーマの国際会議で提出された論文を収録したものである。会議に出席した松井 章氏が本誌第8号 (p. 27-28) で会議の内容を紹介しているので参照されたい。

本書は16の論文からなるが、最初のCOLES, B. の Introduction: the wetland revolution in prehistory? では、これまでの経過とこの国際会議の概要・意義、本書に収録されなかった論文内容、収録論文の意義を簡潔に紹介している。論文が対象とする地域は、England, Ireland, France, Switzerland, Germany, Poland, North West Russia の欧州各地, North West Coast, Florida の北米各地, それに日本と New Guinea の各地である。いずれも各地のこれまでの研究を紹介しつつも、最新の成果を含んでおり、世界における低湿地遺跡の発掘調査の概要と先端的な研究を知る上で好適な内容を擁している。各地のトップを切る松井 章氏の Wetland sites in Japan では、日本各地の旧石器・縄文時代および弥生時代の主要な遺跡が紹介されているが、とくに粟津湖底遺跡についてはその全貌が図表を添えて詳述されている。最後の COLES, J. & COLES, B. の The wetland revolution: a natural event では、低湿地考古学における問題点や展望が概括的に述べられており、本書の締め括りに相応しい。

本書は WARP, Department of History and Archaeology, University of Exeter, Exeter EX 4 4 QH, UK に連絡を取れば入手できるはずである。

(辻 誠一郎)